

これからの幼児教育

これからの幼児教育

2013

夏

2013年5月30日発行

発行人 岡田大介

編集人 谷山和成

発行所 株式会社ベネッセホールディングス

ベネッセ次世代育成研究所

©Benesse Corporation 2013

表紙／裏表紙

千葉県 ● 市川市立信篤幼稚園

『これからの幼児教育』刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

『これからの幼児教育』は全国の園長先生に無料で年3回お届けしています。

次号(秋号)は2013年9月上旬発刊(予定)です。

第1特集

子どもの育ちの「見える化」で保護者にもっと信頼される園になる

インタビュー ● 玉川大学教育学部乳幼児発達学科 准教授 大豆生田啓友

第2特集

保育者がいきいきと働ける「支え合い」のある園づくり

新連載

NEW 「学びに向かう力」を育む ● 第1回

「人の話を最後まで聞く力」を育む

園内で
回覧
してください

2 第1特集

子どもの育ちの「見える化」で
保護者にもっと信頼される園になる

- 2 インタビュー
「学び・育ちの物語」で園を「見える化」する
玉川大学教育学部乳幼児発達学科准教授 大豆生田啓友
- 6 事例1 ● 港北幼稚園 (神奈川県・私立)
連絡帳で一人ひとりの成長を発信し
子どもの世界の面白さを伝える
- 8 事例2 ● 長房西保育園 (東京都・公設民営)
具体的な個人記録を定期的に発信し
「心の育ちのストーリー」を伝える
- 10 事例3 ● 品川区第一野すこやか園 (東京都・公立)
個人面談で育ちを共有して
子どもを共に育てる関係をつくる
- 11 園からの情報発信
全国の園長先生の実践例
- 12 Q&A
保護者に対する子どもの育ちの「見える化」こんなときどうする？



18 第2特集

保育者がいきいきと働ける
「支え合い」のある園づくり

- 18 職場づくり編/チェックシート
保育者の心の健康を守る職場とは？
大阪社会医学研究所 主任研究員 重田博正
- 21 個別サポート編/Q&A
心のケアを必要とする保育者を
園全体で支えるには？
臨床心理士 永田陽子
- 24 連載
学びに向かう力を育む
第1回「人の話を最後まで聞く力」を育む



「これからの幼児教育」2013夏号 2013年5月30日発行
 発行人 岡田 大介 企画・制作 ベネッセ次世代育成研究所
 編集人 谷山 和成 印刷・製本 凸版印刷株式会社
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション 編集協力 (有)ペンダコ、二宮 良太
 〒206-8686 東京都多摩市落合1-34 撮影協力 ヤマガチイッキ 荒川 潤
 イラスト協力 アサママリカ
 ©ベネッセ次世代育成研究所 ©無断転載を禁じます ※掲載内容は2013年4月中旬現在のものです。

14 データから見る幼児教育

0~2歳児をもつ
保護者の子育ての現状とは？

子どもは未来

私たちは、子どもたちの成長に寄り添う研究と社会への発信を通して、
一人ひとりが学びに向かい、今と未来を“よく生きる”ことに貢献することを目指しています。

ベネッセ次世代育成研究所『これからの幼児教育』編集部

本誌は
無料です

ベネッセ次世代育成研究所の発刊物は、
ご希望に合わせて園へお届けします

※ただし、複数冊をご希望の場合は、宅配料がかかる場合がございますので、あらかじめご了承ください。

お手続き方法

電話、もしくは、ホームページよりお申し込みください。通常はお手続き完了から1週間~10日程度でお届けします。お急ぎの場合はホームページからのダウンロードが便利です。

電話

0120-933-964 通話料無料
 受付時間◎10:00~17:00 (日曜・祝日は除く)
 ※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。
 ※携帯電話・PHSからもご利用になれます。
 ※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は
 086-270-5037へおかけください。
 (ただし通話料がかかります)

ホームページ

インターネットで検索してください。
 ベネッセ次世代育成研究所 検索
<http://www.benesse.co.jp/jisedaikin/>
 ◎ベネッセ次世代育成研究所の発刊物のお申し込みと閲覧(PDFファイルのダウンロード)が可能です。

発刊物の紹介

これからの幼児教育 A4判 24ページ
 ◎主な記事の内容(最新5号分)
 2013年 春号 特集 保育者の気づきと学びを促す園内研修
 2012年 秋号 特集 保育者の力を引き出す園長のリーダーシップ
 夏号 特集 これからの園運営を考える
 春号 特集 子どもの力を引き出す園での信頼関係
 2011年 秋号 特集 のめり込める遊びで幼児の心と体は育つ
 ※上記以外のバックナンバーについてはホームページをご覧ください。
 その他、幼児教育・保育に関する発刊物
 ●第1回 幼児教育・保育についての基本調査報告書
 (幼稚園編・保育所編)
 ●幼児の遊びにみられる学びの芽
 ●保育所での子どもの発達と保育のポイント



はじめに

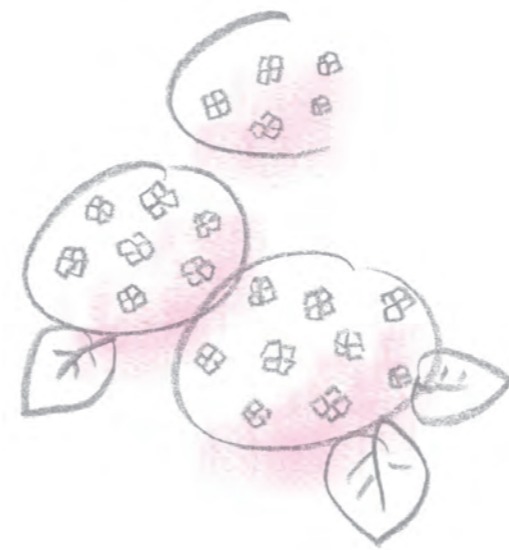
園経営や園生活が円滑に進んでいくためには、園に関わる人と人との関係づくりが何より大切になります。今号では、保育者と保護者、そして保育者同士の豊かな関係づくりをテーマにして、誌面を作成しています。

まず、第1特集では、保育者と保護者との信頼関係を強固にしていくための、「子どもの育ちを発信するポイント」を取り上げます。識者のインタビューや各園の取り組みをもとに、どのような情報発信で保護者が「自園のファン」に変わっていくのかを考えます。

また、第2特集では、保育者の心の健康とそのケアについて考えます。異動などで新しい仲間を迎えた園も多くあると思います。保育者同士の豊かな人間関係づくりや、特に若手保育者の心の健康に関心を抱く多くの園長先生にお届けしたい記事です。

保育者と保護者、そして園の保育者同士の関係が豊かになるほど、保育の質は向上していきます。なによりも子どもたちのために、今回の誌面が少しでもお役に立てれば幸いです。

『これからの幼児教育』編集部 橋村美穂子



子どもの育ちの「見える化」で保護者にもっと信頼される園になる

保護者との関係構築のために、さまざまな工夫をされている園は多いでしょう。

信頼を得るためには園の理念や日々の様子を伝えることが大切です。

園のありようが保護者にしっかりと見えるためには、何をどのように伝えればよいかを考えます。

インタビュー

「学び・育ちの物語」で園を「見える化」する

保育の成果はすぐに目に見えるものではありませんが、

日常のささいな場面でキラリと光るようにして表れることがあります。そのような子どもの育ちを見逃さず、

「学び・育ちの物語」として保護者に伝えることで信頼関係はさらに深まるでしょう。

「ブラックボックス」である園を保護者に向けて「開く」

保護者には園の様子がそもそも伝わりにくい

多くの園では、保護者に対する情報発信を大切にしていることとします。しかし、それにも関わらず、保護者にとって園は「ブラックボックス」であることが珍しくありません。それは、園が伝える情報が活動中心の発信になりがちで、保育者がどんな働きかけを行い、子どもがどう成長したかを十分に伝えることが難しいからです。その背景には、そもそも、幼児教育の成果が目に見えにくいものだというところもあるでしょう。

そのため、保護者は日常的に園でどのような活動が行われ、わが子がどう育っているのかを、ほとんど知

らないということを踏まえて話さなければ、求められている情報を発信できず、信頼関係も深まりません(3ページ 図1参照)。

保育は目先の成果を目指していませんから、学校のようにテストなどで成果を数量化することはできません。そのため、保育の特色として「遊びや生活を大切にしている」といったメッセージを伝えることとなりますが、どの園も似通っていて、なぜ大切なのかを説明することが難しく、保護者には園ごとの違いが伝わりにくいことがあります。

一方で、特別な活動をアピールする園も増えていますが、それだけでは、幼児教育の本質である遊びや主体的な活動の大切さを伝えたことにはならないでしょう。



玉川大学教育学部
乳幼児発達学科准教授
大豆生田啓友

おおまめうだ・ひろとも
専門は、幼児教育学・保育学・子育て支援。編著書に「これでスッキリ! 子育ての悩み解決100のメッセージ」(すばる舎)、『よくわかる子育て支援・家族援助論』(ミネルヴァ書房)など。

子どもの変化、成長を効果的に伝える「学び・育ちの物語」

保育者が語り合う園の風土が「学び・育ちの物語」を生む

どの園でも、大切にしている保育の方針や特色があるはずですが、保育の特色を効果的に発信するためには、どのようなポイントを押さえればよいのでしょうか。

私が、保育の内容がすばらしく、保護者との信頼関係も深いと感じる園には、興味深い共通点があります。それは保育者同士が、日頃から子どものよさや成長などを語り合う風土があることです。「〇〇ちゃんがこんなことをしていた」といった子どものよさや育ちを語り合う中で、単なるエピソードが「学び・育ちの物語」、つまりその子の変化、成長の物語へと変化し、それが保護者にも伝わって、信頼関係が育まれているのです。

単に「今日は砂遊びをしました」など、活動の事実を伝えるだけでなく、その中で子ども一人ひとりの思いや変容、保育者の意図や関わりを織り交ぜたものが、「学び・育ちの物語」なのです。

「学び・育ちの物語」を伝えて保護者との信頼関係を築く

「学び・育ちの物語」を考える上で参考になる例をご紹介します。

ある母親は、3歳で入園した娘が当初、なかなか他の子どもと遊べず、いつ見てもひとりで過ごしていることがとても気になっていました。3歳ですからひとり遊びは珍しいことではありませんが、母親はと

ても不安だったそうです。

その状態が続いたため、母親は勇気を出して担任の保育者に相談しました。すると、保育者は「十分にお伝えできていなくてごめんなさい。お母さまとしては心配ですよ」と母親の気持ちを受け止めました。そのうえで「入園後しばらくは、緊張していてあまり積極的に遊びにとりかかろうとはしなかったですね。でも、周りの子の遊びをじっと見ていることが多くありました。私としても、声はかけていたのですが、手を出そうとはしないことが多かったんです」と、これまでの様子を伝えました。

そして「その後、ほかの子の遊びにとっても興味を持ちだしたようで

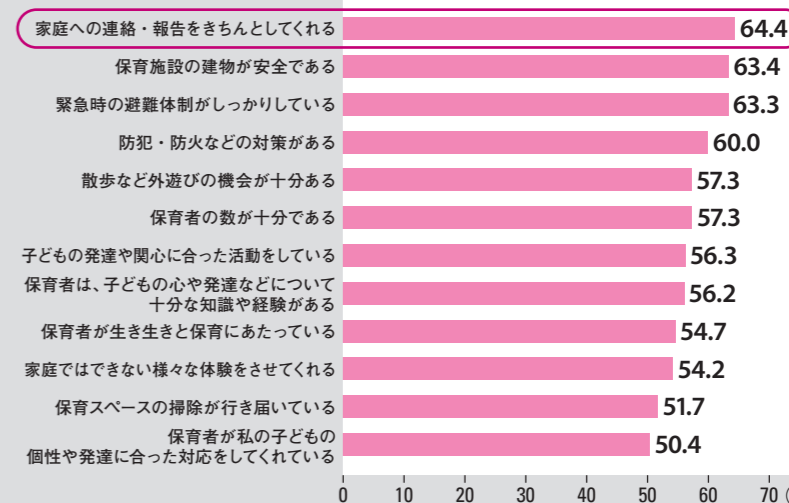


す。今日も、砂場でプリン作りをする他の子たちのすぐそばで、自分も砂のプリンを作っていました。直接はかかわっていないけれど、気持ちと一緒にののだと思います。本人に

図1 参考データ

保護者が園に最も重視しているのは「家庭への連絡・報告」

保育施設的环境や設備、保育者などについて、お子さんを保育施設に預ける中で、あなたが重視していることについて、それぞれ、お気持ちにもっともあてはまるものをひとつずつ選んでください。



※「きわめて重視している」と回答した割合が50%以上の12項目を掲載。
※子どもを保育施設・サービスに預けている母親(607人)の回答。
出典/ベネッセ次世代育成研究所「2009年~2011年 首都圏“待機児童”レポート」(2012)

とってこれはとても大きな変化です」と、変化を語りました。

さらに、「今はまだ、他の子との直接的なかわりはほとんどないけれど、時間の問題だと思っています

す。だから、私が間を無理につなぐよりも、子ども同士が遊びをきっかけにつながるチャンスを待ちたいと思っています」と保育者の思いを語りました。

こうした保育者の言葉を聞いて、保護者はとても納得しただけでなく、保育者がわが子を丁寧に見ていることを実感し、とてもうれしく感じたそうです。

「学び・育ちの物語」を伝える4つの大切なポイント

一般論にとどまらず 「我が子の物語」にする

ご紹介したように、子どもの成長を物語として伝えるためには、4つのポイントがあります。

ポイント① まず、保護者の気持ちを受け止めることです。保護者の不安や悩みがたとえささいなことであっても、「お母さまとしては心配ですね」と保護者の気持ちを受け止めたうえで、どんな思いなのか、聞く姿勢を大切にしましょう。

ポイント② 子どもの変化をよく観察して、エピソードとして伝えることです。先ほどの例では、一見、一人で砂場で遊んでいるだけに見えますが、実はその中身は変化しています。それを具体的に伝えることで保護者は安心します。例えば、連絡帳に「ダンゴムシ集めを楽しみました」と書くだけでは、単なる情報提供に過ぎません。「〇〇くんと一緒に探すうちに、『暗いところに多

くいる』ことを発見して喜んでいました」「ワラジムシとの見分け方を友達に教えていました」など、その子がどれだけ夢中になって探究していたか、また他の子どもとどうかかわり協働していたかといった内容が加わることで、情報にドラマ性が生まれます。もちろん、このようなドラマを生み出すためには、子どもの探求心や協同性を信じつつ、子どもが主体的にワクワクしながら活動できる環境を整える「保育者のしかけ」が必要であることは言うま

でもありません。
ポイント③ 現状とともに、これからの関わりや見通しを話すことも大切です。先の例で言えば、「直接的なかわりは今はないけど、時間の問題だと思う。子ども同士が遊びをきっかけにつながるチャンスを待ちたい」と伝えたことで、保護者は安心感を得ました。

ポイント④ 保育者が自分の思いを自分の言葉で語ることも重要です。もし、この場面で「3歳児のひとり遊びは普通のことです」と一般論を伝えるだけであれば、保護者の不安は解消されなかったでしょう。保育者が子どもの実態に合わせて「私は子ども同士がつながっていくを見守りたい」と自分の思いを話したからこそ、保護者の心に響くアドバイスとなったのです。



「学び・育ちの物語」の発信は保育の向上にもつながる

連絡帳やおたよりでの一文が園への印象を変える

「学び・育ちの物語」というと、起承転結で構成された文章を連想し、負担に思う方もいらっしゃるかもしれませんが、そんな難しいことではありません。連絡帳やおたよりに子どもの具体的な姿に関する一文があるかないかで、受け取る側のイメージは全く違います。子どもの様子に関する具体的な記述が一文入るだけで、「丁寧に見ていることが伝わる」「家での話題になる」「先生がどんな思いでかかわっているかわかる」と保護者は安心し、満足するはずです。

連絡帳を書く際には、保護者の気持ちになって書くことを考えてみてください。文章としての体裁を整



え、誤字脱字をなくすことも大切ですが、保護者が元気に子育てに向かえるようなメッセージが何より重要です。それができたとき、連絡帳は、子育て支援の重要なツールとして機能します。

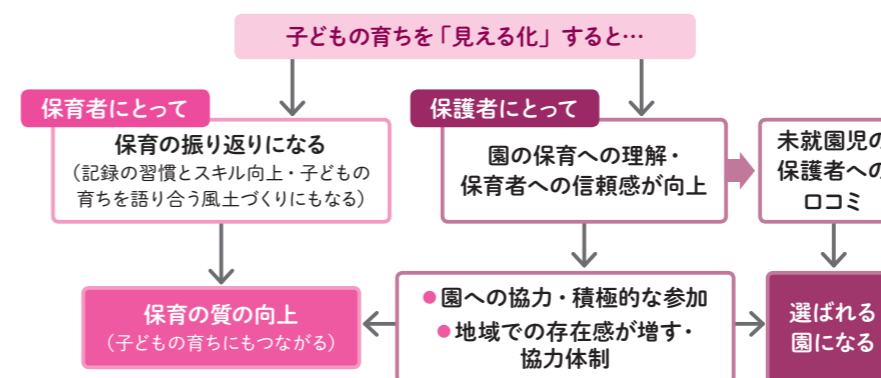
ファンが増えることで園の保育がよりよくなる

「学び・育ちの物語」を効果的に伝えることで、保護者の中に園に対するファン、応援団が増えていくで

しょう。ファンになった保護者は、園の活動に積極的に参加してくれるはず。私の知るある園は、園の活動に対する保護者の参加率が非常に高いのですが、それは決して強制ではなく、「子どもの姿をもっと見たい」「楽しい活動に参加したい」といった保護者の自主性に支えられています。

当然、参加したくないという保護者もいます。そうした保護者はまだ園のファンになっていないのかもしれませんが、丹念に「学び・育ちの物語」を語り、保育の面白さや子どもの育ちの豊かさを伝えれば、保護者がファンに変わる可能性は大いにあります。そうして、ひとりまたひとりと保護者を巻き込むことで、子どもを取り巻く環境はより豊かになり、ひいては園の保育そのものの質向上に確実につながっていくのです(図2)。

図2 育ちを「見える化」することのよさ



現場のみなさんへ

多くの先進国では幼児教育の重要性が認められ、保育者の仕事がとても大切なものであると考えられています。しかし日本では残念ながら、保育者はまだ適正な評価を受けていな

いと感じます。保育を見る保護者の目を豊かにすることも、保育者の役割なのかもしれません。毎日忙しいとは思いますが、保護者への伝え方を少し工夫することで、幼児教育に対する理解が進み、保育者との信頼関係が強固になり、結果として保育の質が高まるのではないのでしょうか。

事例 1

連絡帳で一人ひとりの成長を発信し 子どもの世界の面白さを伝える

港北幼稚園 (神奈川県・私立)

子どもが遊びの中で育っていることを保護者に実感してもらううえで、港北幼稚園が重視しているのが、連絡帳による情報発信です。「交換日記」のようなやりとりを通し、子どもを共に育てる良好な関係も育っていきます。

保護者と子どもの育ちを共有して協力関係を育む

連絡帳のやりとりを通し 保育について「解説」

「子どもの世界は面白い」と保護者に実感してもらうことが、共に子どもを育てる関係づくりの出発点になる、それが港北幼稚園の保育の基本となる考えです。学校法人渡辺学園理事長の渡邊英則先生は次のように話します。

「子どもは楽しい活動だけではなく、ケンカをしたり葛藤をしたりしながら育ちます。その中で子どもなりに一生懸命に考え、感じており、そこから大人が学べることは少なくありません。まずは保護者のみなさんに、そうした子どもの世界を理解していただきたいと思っています」

その一環として保護者のサークル活動を充実させています。例えば、「おはなしの部屋」は、保育時間中に子どもたちに絵本の読み聞かせをするというサークル活動で、約90名の保護者が登録しています。また「ガーデニングの会」は、子どもと一緒に花壇の整備や野菜の収穫を楽しむというものです。こうした活動を通し、子どもの反応をダイレクトに感じることで、保護者の子

ども理解を深めると共に、保育活動の理解も深まっていきます。

サークル活動は、保護者の側から子どもの世界に入っていき体験です。子どもの世界を実感するにはよい方法ですが、これだけでは十分ではありません。

「子どもの世界を知るには、保育者が間に入って『解説』することも必要です。そこで日頃から保護者にお会いしたときには口頭で子どもの姿を伝え、連絡帳のやりとりを大切にしています」(渡邊先生)

文章化することで 育ちを実感しやすくする

連絡帳には特別な形式があるわけではなく、一般的なA6版のノートを使用しています。一定の枠を設けないほうが、その日のできごとによって文章量を調整できるなど、使い勝手が良いという考えです。

年度当初の保護者会では、連絡帳は「園と家庭を結ぶ大切なノート」であると強調し、気づいたことや悩み、相談があれば、小さなことでも書いてほしいと伝えます。そのため頻繁に提出する保護者もいて、まるで「交換日記」のように、やりとり

学校法人渡辺学園 理事長 港北幼稚園 渡邊英則先生



4歳児担任 鈴木真美先生

が続くこともあります。

保育者が連絡帳を記入するうえで特に重視しているのが、一人ひとりの育ちを具体的に伝えることです。

「連絡帳の記入では、客観と主観の両方を大切にしています。子どもが遊びの中で育っていく姿を客観的に伝え、それに対する保育者の主観的な見方を提示することで、園としての保育観が伝わると考えています」(渡邊先生)

連絡帳には、会話とは異なるメリットがあるといいます。4歳児担任の鈴木真美先生はこう語ります。

「保護者からは、『文章にしてみました』という声も聞かれます。そこでエピソードやそれに対する私の考え、気持ちなどを丁寧に書きつづけています」

子どもが発した印象的な言葉なども、文章にすることでより伝わりやすくなります。また、ふだんは園を訪れることが少ない父親や祖父母が読めるというよさもあります。

子どもが発した印象的な言葉なども、文章にすることでより伝わりやすくなります。また、ふだんは園を訪れることが少ない父親や祖父母が読めるというよさもあります。

「書くことがない」状態は 保育に問題があることも

連絡帳のやりとりを通し、保護者にはどのような変化が表れるのでしょうか。

「大人の価値観で子どもを見ていた保護者が次第に変わっていきます。例えば、『言うことを聞かないときは、子どもが自分の思いをもって別のことに集中している場合もある』などと、子どもの側から考えられるようになります。むしろ、こうした変化は連絡帳だけではなく、日頃の会話や保護者活動なども大きく関係します。しかし、子どもの見方を広げていくうえで連絡帳が欠かせない役割を果たしているのは確かです」(渡邊先生)

保育者にとっても、連絡帳は貴重な記録となります。鈴木先生は、成長の節目だと感じられるエピソードがある連絡帳はコピーして手元に残し、指導要録などの記入時に参考にしているそうです。また過去の連絡帳に目を通すことで、子どもの育ちを振り返り、保育の手立てを考える材料にもなります。

日々の連絡帳の記入は、保育者の力量の向上にもつながります。

「『連絡帳に書くことがない』とい

連絡帳のやりとりと感想の一例 4歳児クラス 男児Aくん

保護者より	
11月△日	
今朝、給食が食べられるか急に不安になったようで、「今日は食べない……」と、ぐずりながら登園しています。お友だちと一緒に大丈夫とは思いますが、様子を見ていただけますか。	
担任からの返事	
11月△日 (当日)	
実際はおかわりをしてモリモリ食べていたのでご安心ください。Aくん自身「がんばって食べた」という思いがあったようで、「おいしかった〜」と嬉しそうでした。献立のことなど、おうちでいろいろと考えて不安になってしまったのかなと思いますが、幼稚園に来ると気持ちの切り替えができるようになってきたのではないかと思います。	

連絡帳のやりとりを行った後

保護者の感想

「先生がちゃんと見てくれてよかった。伝えてよかった」と思いました。預かり保育を利用しているので、普段はなかなか担任の先生に会えません。電話も難しいので息子に変化が見られたときに連絡帳を活用しています。情報共有ができ、文字に残るのもうれしいです。

担任の感想

連絡帳は、保護者が書きたいときに書くという位置づけなので、「園に行きたくない」などの気になる姿を書かれることはよくあります。園でも気にかけるようにしますが、先入観をもち過ぎず、その子の「園だからこそ見せる姿」「園でしか見せない姿」も伝えたいと思って返信しています。

う状態は、書くべきエピソードが起らなかった、あるいは子どもの遊びや育ちを発見できなかったということ。また年度の初めと終わりに同じようなことを書いている場合も、子どもの育ちを十分に見とれていないことの表れです。連絡帳

に書きたいことがたくさんあるほど、保育は充実し、保育者としての視点も豊かであるといえます。今後とも連絡帳を貴重な材料のひとつとして、保護者とともに保育を充実させていきたいと思っています」(渡邊先生)

港北幼稚園

◎保育方針は、「生き生きした子ども」「思いやりのある子ども」の育成。保育に保護者との連携は欠かせないという考えから、「おはなしの部屋」「ガーデニングの会」「おしゃべり会」「港北キッチンクラブ」などサークル活動を充実させている。

園長 渡邊シズ先生
所在地 神奈川県横浜市都筑区早瀬 3-35-25
園児数 290人(3~5歳児)



事例2

具体的な個人記録を定期的に発信し「心の育ちのストーリー」を伝える

長房西保育園 (東京都・公設民営)

長房西保育園は、日常の園生活を通じた子どもの育ちを伝えるために、「育ちのカルテ」ともいえる丁寧な個別記録「あゆみノート」を作成しています。写真やエピソードを通し、子どもの育ちの物語を具体的に伝えられるのが、あゆみノートのよさです。

エピソードとその解説で、子どもの育ちを「証明」

育ちのストーリーを伝え子どもの見方を広げる

保護者が知りたいのは、「日常の子どもの姿」です。しかし、イベントなどで子どもの様子は見られても、日常的に園でどのように遊び、育っているかを実感する機会はあまりありません。そこで長房西保育園では、具体的なエピソードを充実させた個別記録「あゆみノート」を作成して保護

者に子どもの育ちを伝えています。あゆみノートはA4用紙一枚で、表裏に記入スペースがあります。表面には写真とエピソードを交えて一人ひとりの育ちを自由に記入します。いわば、「育ちのカルテ」のような内容です。また裏面は一人ひとりの保育目標とその達成に向けた保育者のかかわり、評価・反省などで構成されます。保護者が家庭での子どもの姿を書くスペースも設けています。このあゆみノートを、

長房西保育園 園長 島本一男先生



0～2歳児は毎月、3～5歳児は年3～4回作成しています。

表面は自由度が高い反面、「何を書けばいいのか」と悩んでしまう保育者もいます。そこで園長の島本一男先生は、「園の理念を念頭に置いて書くように」と、保育者に伝えています。「『自分・人・自然』の3つが大好きな子どもを育てる」というこの園の理念が具現化されている

●あゆみノートの表面



- 記入のポイント**
- ◎子どもは発見や学びを繰り返しながら育っていることを伝える
 - ◎集団の中での関わり合いによる育ちにも重点を置いて書く
 - ◎5W2H (いつ、どこで、誰が、何を、どのように、どのくらい、なぜ) を整理する
 - ◎肯定的な表現を心がける

- 写真のポイント**
- ◎できれば文章と連動させたいが、本人の他の場面の写真でもよい
 - ◎活動の中で子どもの姿や表情がわかる写真を入れる

＊ 保護者からの声 ＊

- 「子どものいいところを見よう」と思うようになった。
- 普段は1か月(幼児の場合は3～4か月)を振り返ることがなかなか難しいので、いい機会になった。
- これからの子どもへの関わりかたを考えるうえでとても参考になった。

保育の場面を切り取って記入するようにしています。

子どもは日々、いろいろな発見と学びを繰り返しています。しかし、保育の専門家とは違う保護者には、「ただ遊んでいるだけ」と見えてしまうこともあります。エピソードの紹介とその解説によって、子どもの育ちを「証明」することは、あゆみノートの大切な役割です。

「あゆみノートで具体的に伝えることで、見えにくかった育ちが見え、保護者の子どもの見方が広がっていきます。それに伴って子どもへの関わりかたがわかるようになるため、子育て支援にもなります。また保育者が『こんな力を伸ばしたい』といった明確な意図を持って保育に取り組んでいることも理解していただけます」(島本先生)

あゆみノートの文章は、5W2H (いつ、どこで、誰が、何を、どのように、どのくらい、なぜ) を、はっきりと書くことを心がけています。こうした要素が含まれていることで文章が客観的になり、保護者が情景を思い浮かべやすくなります。

単なるありのままの姿ではなく心の育ちの物語を伝える

あゆみノートにはどのような文章が記入されるのか、一例を紹介しましょう。

砂場から離れた場所で砂のプリンを作ろうとしていたBさんは、両手で砂をすくい、数回、砂を運んでいました。そのうちにカップを持って行ったほうがよいことに気づき、カップに砂を山盛りにして運ぶよ

うになりました。そしてカップをひっくり返して上手に砂のプリンを作ると、とてもすごいことをしたと満足げな顔つきになって、友だちに作りかたを教え、プリン屋さんごっこが始まりました。(一部抜粋)

子どもが何かに気づいたり、満足感を覚えたり、他の子どもと関わったり、遊びが展開したりといった場面が、あゆみノートに記されます。単にありのままの姿を書くのではなく、「学び・育ちの物語」として子どもの心表現することを、特に大切にしています。また写真は紹介するエピソードと同じものが理想ですが、それだとハードルが高いため、本人の他の場面のものでよいことにしています。

子ども同士のトラブルもまた、成長を伝えるよい機会だといいます。「トラブルの中には、葛藤やその克服といった、子どもの成長を促す大切な要素が含まれています。保育者の導きによって子どもが気持ちを切り替えて活動を展開させていくプロセスを描くことで、保護者はトラブルが成長のきっかけになることを理解します」(島本先生)

トラブルについて記す際は、誤解を招かないように表現には細心の注意を払います。例えば、「友だちのおもちゃを取った」ではなく、「欲

しくなって黙って使った」といった子どもの側に立った書き方をします。

記入にかかわる指導が保育者の個別研修にもなる

保育者が一人ひとりの子どもの育ちをあゆみノートに記入するためには、日頃からしっかりとし思いをもって保育に取り組むとともに、子どもを理解する力をもっていないてはなりません。

「あゆみノートを書くことは、その時点での子どもの育ちを把握するとともに、明日の保育を考えるベースになります。逆に言えば、きちんと記入できなければ、保育者として必要な視点が不足しているということになります。私はすべてのクラスのあゆみノートに目を通して指導しますが、それが言わば保育者の個別研修のようになっています」(島本先生)

子どもの育ちを丁寧に伝えることで、保護者との信頼関係も積み上がっているといいます。子どもの理解、保育者育成、そして保護者との関係づくりと、あゆみノートは園になくてはならないツールとなっています。

八王子市立長房西保育園

◎社会福祉法人相友会が運営。「自分の意志でやろうと思ったことができる時間と空間と仲間」を大切に、生きる喜びをみんなと共有する保育を目指している。毎日ブログを更新するなど保護者向けの情報発信にも力を注ぐ。

園長 島本一男先生
所在地 東京都八王子市長房町588都営西8号棟
園児数 定員100人(0～5歳児)



※プロフィールなどは2013年1月末時点(取材時)の情報です。

事例3

個人面談で育ちを共有して子どもを共に育てる関係をつくる

品川区第一日野すこやか園 (東京都・公立)

第一日野幼稚園と西五反田第二保育園からなる幼保一体施設の第一日野すこやか園。幼稚園・保育所共に、子どもの育ちを伝えるとともに、保護者との連携を深める機会として、個人面談に工夫をしています。

よい点や気になることを直接保護者に伝え、関係を構築する

話しやすくするための環境の工夫も大切

第一日野すこやか園では、子どもの育ちを伝えるとともに、コミュニケーションを深める機会として、個人面談を大切にしています。

保育所は年1回以上、幼稚園は年2回、個人面談を実施します。保育所は保護者の勤務に合わせて、朝・夕などに面談を実施しています。面談の時間は、幼稚園は20分程度(必要な場合は別の日にゆっくりと時間を取ることもあります)、保育所は30分で設定しています。

個人面談では、最初に保護者の気持ちを受け止めることを大事にしています。5歳児担任(幼稚園)の島倉千絵先生はこう話します。

「まずは気になることなどを話してもらい、耳を傾けます。保護者の話を十分に聞いてからのほうが、こちらの話を受け止めてもらえるからです」

子どもの育ちについて話すときは、よい点やがんばっていることを中心に、エピソードを交えて伝えます。気になることもしっかりと話し、「今後は、このように接していきましょう」と、その後の対応を説



明します。

なかには、緊張される保護者もいます。そこで、話しやすくするために座る位置は真正面ではなく斜めにしたり、机に子どもが作った作品を置いて話のきっかけをつくらうといった工夫をしています。

また、少数ですが、園での様子に関心が薄い保護者もいます。そのような保護者こそ個人面談が大事だと、5歳児担任(保育所)の小瀧美

行先生は話します。

「『一緒にお子さんの成長を見ていきましょう!』と伝え、忙しくても、できるだけ子どもの育ちに関心をもってもらえるように、子どもの成長した姿を伝えます。最初は消極的な保護者も、『こんな育ちがあったんですよ』などと話すうちに、次第に関心が高まっていきます」

個人面談は、保護者との連携や子育て支援の機会にもなっています。

品川区第一日野すこやか園(第一日野幼稚園・西五反田第二保育園)

◎2010年に幼保一体型施設となる。同じ敷地内に、第一日野小学校、文化センター、図書館などが併設。小学校とは接続カリキュラムを作成している。

園長 丸山智子先生(第一日野幼稚園)、大島正美先生(西五反田第二保育園)

所在地 東京都品川区西五反田6丁目5-6

園児数 70人(第一日野幼稚園・4~5歳児)、130人(西五反田第二保育園・0~5歳児)



園からの情報発信

全国の園長先生の実践例

園の保育内容と子どもの育ちを保護者に知ってもらうため、どのような情報発信を行っているかをうかがいました。

1 写真や動画でリアルな姿を伝える

●保育中の子どもの様子を撮影したスナップ写真を園で掲示しています。保育者によるコメントも載せて、保育のねらいもお伝えします。保護者は子どものいきいきした表情を見て、安心しているようです。(三重県/公立幼稚園)

●毎月の誕生会には対象園児の保護者も参加してもらいます。そこでは園生活の様子を撮影した動画をお見せし、園での生活や遊びの姿を伝えています。保護者は「園での様子がわかり、安心して登園できる」と喜んでいます。(埼玉県/私立幼稚園)

●各クラスにあるホワイトボードに、日々の保育の写真とコメントを掲示するほか、玄関にデジタルサイネージ(電子看板)

を設置し、園全体の一日の様子を流しています。連絡帳だけでなく、園児の生活を写真や動画で具体的に知っていただくことで、保護者との信頼関係を築くのに役立っています。(東京都/私立保育園)



2 情報を受け取りやすいようにHPやメールで伝える

●保護者やその祖父母など希望されるかた全員に、毎日、園の様子をメールで一斉送信しています。それぞれ園児の成長が見られた時や特に伝えたいことがある時には、個別にメール送信もしています。(新潟県/私立幼稚園)

●最近の保護者は、紙媒体よりもスマートフォンやパソコンの方が目を通してくれる傾向にあるようなので、ホームページやソーシャル・ネットワーキング・サービス(※)を積極的

に活用しています。こうした情報発信がきっかけになり、保護者と直接会話する機会が増えました。(佐賀県/私立幼稚園)

●保育園のホームページ内に保育ブログを設け、保護者だけが閲覧できるページを開設しました。日々の保育の様子を報告しています。始めたばかりですが、徐々に反応が見られています。(兵庫県/私立保育園)

3 電話で直接やりとりしながら伝える

●なかなか連絡帳やおたよりを見てくれない保護者には、電話する時間帯を考慮した上で、担任からこまめに電話連絡をしています。次第に、園の行事や保育方針についても理解を示してくれるようになりました。(愛知県/私立幼稚園)

●家庭によってはお迎えに来ることが多い祖父母が先に連絡

ノートを見ることも考えられます。そのような家庭の場合、大切な話は直接電話で保護者に話すように配慮しています。保護者がお迎えに来るのは年に数回ですが、来られる日は担任とたくさん話をされていて、信頼関係ができています。(静岡県/公立幼稚園)

そのほか、こんなひと工夫も!

- 連絡帳では一方的に情報を伝えるだけでなく、文の最後を「～ですか?」など疑問形で終わるようにしたところ、保育者の問いかけに対して保護者から答えが返って来るようになりました。(京都府/公立幼稚園)
- 行事の後や学期ごとに、子どもの成長について保護者にアンケート調査をしています。後日、懇談会や毎日の送迎

時を利用し、その内容をもとに一人ひとりの保護者と話し合っています。(香川県/公立幼稚園)

●連絡ノートを書く際に心がけているのは、園児の会話などを引用して、園の情景が目に見えようようにすることです。(青森県/私立保育園)

※ソーシャル・ネットワーキング・サービス: インターネット上で人とのつながりを構築できるサービスのこと。Facebook、mixiなどが知られている。

保護者に対する子どもの育ちの「見える化」 こんなときはどうする？

保護者に対して子どもの育ちを発信していくうえで、難しさを感じている園長先生もいらっしゃるのではないのでしょうか。保護者とのつながりを強める発信をするには、どのような工夫が必要なのか、3名の先生にお聞きしました。

1 忙しくて時間が取れない

Q 一人ひとりの子どもの育ちを丁寧に整理して伝えたいとは思いますが、忙しくてなかなか時間が取れません。どうすれば負担を軽減できるでしょうか。



A1 写真の活用などで効率化を

大豆生田先生

一人ひとりについて文章で伝えようとすると時間がかってしまいますので、写真を活用して時間や労力を軽減してみるから始めてみてはいかがでしょうか。写真はそれだけで情報量があり、そこに「みんなでダンゴムシを探しながら散歩しました」といった一文を書き添えるだけで、そのときの情景を伝えることができます。

A2 業務の一本化によって負担を軽減

島本先生

書かなければならない書類はいろいろとありますが、いずれもそのねらいは子ども理解ですから、一本化できる書類や業務があるはず。例えば、連絡帳と保護者支援をどう結び付けるかを考えれば効率化が進むと思います。また私の園では、パソコンの導入によって業務が効率化しました。データの管理や共有が楽になり、結果的にデスクワークの負担が減りました。

2 育ちの気になる点を伝えるのが難しい

Q 子どもの育ちを伝えるうえで、気になることをどのように伝えれば、保護者に誤解なく理解してもらえるかを悩んでいます。



A1 事実だけでなく、背景にある子どもの思いや対策を伝える

渡邊先生

事実だけでなく、子どもの思いや保育者の考え、さらにその後の見通しを伝えることで、保護者と課題を共有するように心がけています。すぐに手が出てしまう子どもの場合、「こういう状況で、このような思いがあったから」と背景をきちんと伝えます。時には、どうするべきかを明確に判断できないこともあります。そういうときは、正直に「考えているところです」と伝え、「お母さんはどう思われますか」「ご家庭ではどうでしょうか」などと聞いて、子どもを一緒に支えていきたいという気持ちを伝えていきます。

A2 変化をこまめに聞いたり伝えたりする

島本先生

基本的には、気になることも率直に伝えるようにしています。プラスのことばかりを書くよりも、むしろ「丁寧に見てくれている」という信頼感につながるからです。ただ、伝えっ放しはよくないと思います。お会いしたときに、「この間、書いた件ですけど……」などと説明し、誤解が生じないようにしています。また、その後の変化をこまめに伝え、子どもの育ちを実感してもらえるように心がけています。適宜、個人面談などでも対応しています。

＊ 回答者 ＊



玉川大学教育学部
乳幼児発達学科
准教授
大豆生田啓友先生



港北幼稚園
理事長
渡邊英則先生



長房西保育園
園長
島本一男先生

3 反応が返ってこない保護者がいる

Q こちらから積極的に情報を発信しても、あまり反応がなく、うまく伝わっているのかわからないケースがあります。



A1 「急がば回れ」でまずは信頼関係を構築

大豆生田先生

保護者支援は、「急がば回れ」の気持ち大切です。根本に戻って信頼関係を築くことを心がけましょう。保護者によっては自分のことに精一杯で、子どもの育ちまで頭が回らないかたもいます。そのような保護者には、「お仕事、大変そうですね」などと気遣う言葉をかけてみてください。「自分の気持ちが受け止められている」と感じ、心を開いてくれるようになるかもしれません。一方で、園の行事や活動への参画を促すなどして関心を高めるように努めるとよいと思います。

A2 書くのが苦手な保護者は電話などでフォロー

渡邊先生

こちらが連絡帳で熱心に伝えても、よい反応が得られないケースはあります。そのような場合はまず、「なぜ、書いてくれないのか」「普段からコミュニケーションは取れているのか」などと、原因をよく考えます。単に書くのが苦手だったり、送迎時などに既に十分なコミュニケーションが取れていたり、理由はさまざまでしょう。書くことが苦手な保護者の場合は、電話やお会いしたときなどに話を聞くようにしています。そのような保護者のかたも、連絡帳は楽しみにしてくれていることが多いので、エピソードなどを十分に伝えるようにしています。

4 保護者と意識のズレがある

Q 保育者の願いと、保護者の願いがずれていると感じるとき、保護者にどのように子どもの育ちを伝えればよいのでしょうか。



A1 遊びの中で育っていることを具体的に伝える

渡邊先生

「この園は泥んこ遊びなど単に遊んでいるだけのように見えて心細く思う」とある保護者が心配を口にされたことがあります。遊びの中で何が育っているかを保護者にしっかり伝えることは大切だと思います。文字や数を身につけさせたいと思っいらっしゃる保護者の方に対しては、その思いは受け止め、「今こんなことに興味をもっています」「こんなときに文字を書こうとしていました」などと遊びの中で文字や数だけでなく、その他の学びが育っていることを具体的に伝えるようにしています。

A2 子どもの育ちの見方を保育者として示す

島本先生

子どもの将来を思い、塾やおけいご事を始めることは、保護者の行動としてよく理解できますし、そのことに対して、園が「それは正しい」「これは違う」などと判断することはできないと思っています。しかし、保護者が用意したそうした場で「子どもがどう楽しんでいるか」「それによって体験を広げているか」という見方を示すことは保育者にこそできることです。そうした形で、保護者に寄り添い続けたいと思っています。

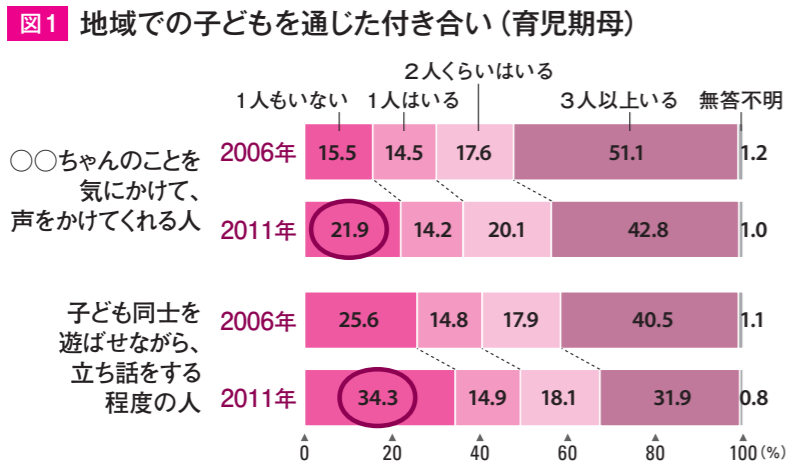
0～2歳児をもつ 保護者の子育ての現状とは？

ベネッセ次世代育成研究所は、2011年11月に、妊娠期から2歳までの子どもをもつ夫婦を対象に、妊娠・出産・子育ての実態把握をすることを目的にアンケート調査を実施しました。この調査結果の中から、特に0～2歳児をもつ保護者の「子育ての情報源」や「地域での子どもを通じた付き合い」について紹介します。家庭への支援を考える材料のひとつとして、ぜひご活用ください。

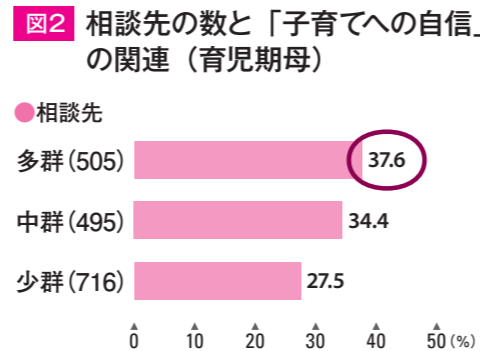
引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用される際には、調査名称を記載してください（例：ベネッセ次世代育成研究所「第2回妊娠出産子育て基本調査（2011）」）。

「子ども同士を遊ばせながら立ち話をする程度の人」が「1人もいない」と答えた母親は34.3%

Q 地域の中で、子どもを通じたお付き合いについておうかがいします。



注1) 調査では4項目を聞いたが、今回は2項目を抜粋して紹介した



注2) 「相談先の数」は図3の14項目について「いつもしている」「時々している」「1～2回はしたことがある」を選択した項目数を算出し、数によって3区分した。無答不明の人は除く。
※数値は「子育てに自信が持てるようになった」について、「あてはまる」または「ややあてはまる」と回答した割合。

研究員解説

地域での子どもを通じた付き合いについて聞きました（図1）。「〇〇ちゃんのことを気にかけて、声をかけてくれる人」が「1人もいない」と回答したのは21.9%で、2006年の15.5%から6.4ポイント増加しました。また「子ども同士を遊ばせながら、立ち話をする程度の人」では「1人もいない」と回答したのは34.3%で、2006年の25.6%から8.7ポイントの増加でした。特に0歳児の子どもをもつ母親に「1人もいない」と回答する傾向があり、地域での付き合いについて聞いた4項目（注1）すべてで「1人もいない」と答えた割合は、2006年の11.1%から2011年の19.0%へ増加しており、5人にひとりとなっ

ています（0歳児19.0%、1歳児11.7%、2歳児9.9%。図表略）。また、子育ての相談相手が多い母親ほど、子育てへの自信が高いという傾向も今回の調査結果から見られました（図2）。少子化という大きな流れの中で、子どもを通じて子育て仲間や地域の人に出会う機会は減少しています。保護者が孤立しないよう周囲がちょっとした声かけを行うなど、社会の中で温かく子育て中の家族を見守ることが求められているのではないのでしょうか。

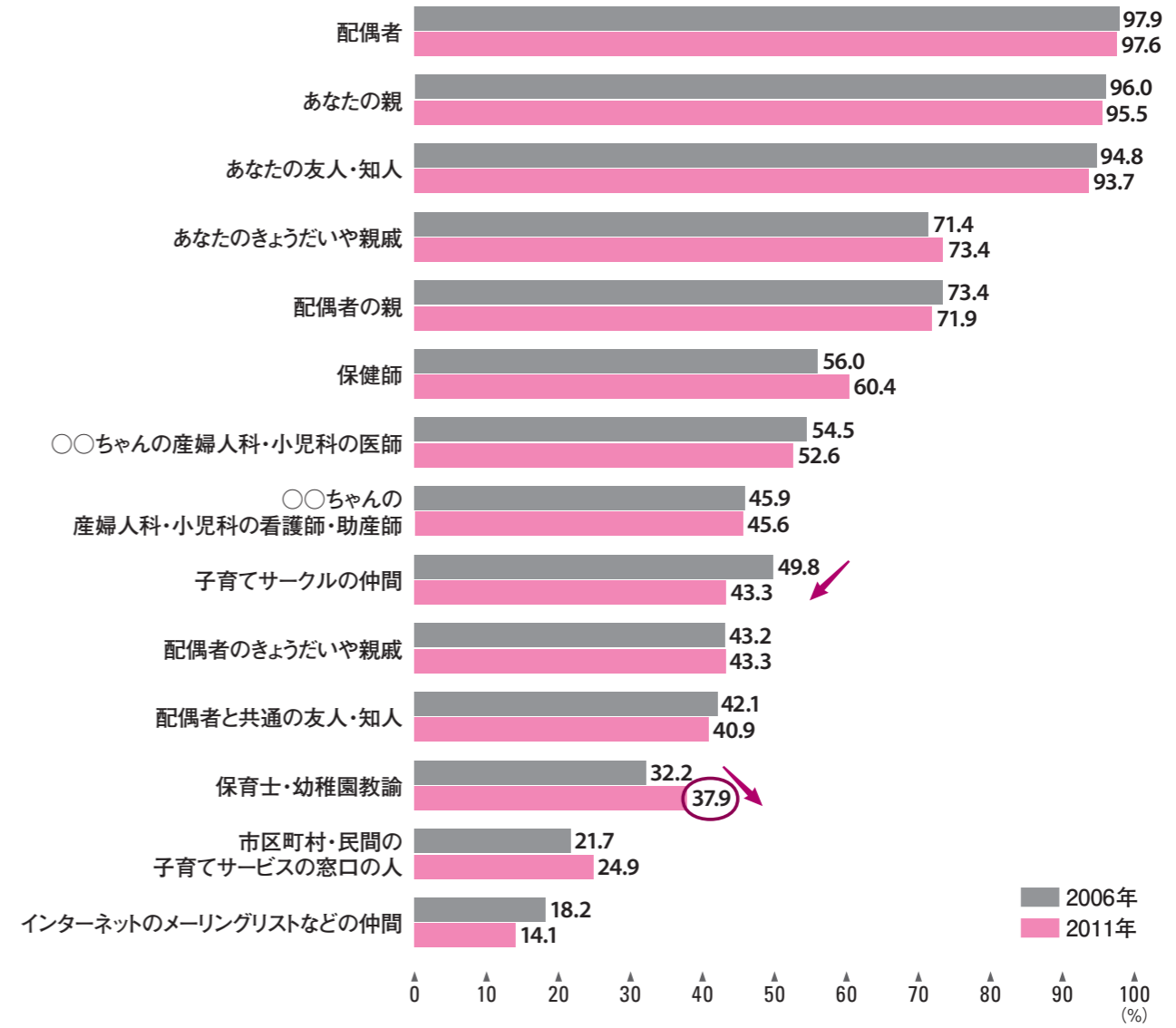


高岡純子研究員 ○ベネッセ次世代育成研究所主任研究員。妊娠・出産や子育てなど就学前の家庭を対象とする調査研究に携わる。

「子育ての相談相手」に「保育者」を選ぶ母親が5年で5.7ポイント増加

Q 〇〇ちゃんの子育てについて、相談したり、話し合ったりしたことがある人は誰ですか。

図3 子育ての相談相手（育児期母）



注1) 「いつもしている」+「時々している」+「1～2回はしたことがある」の%。

研究員解説

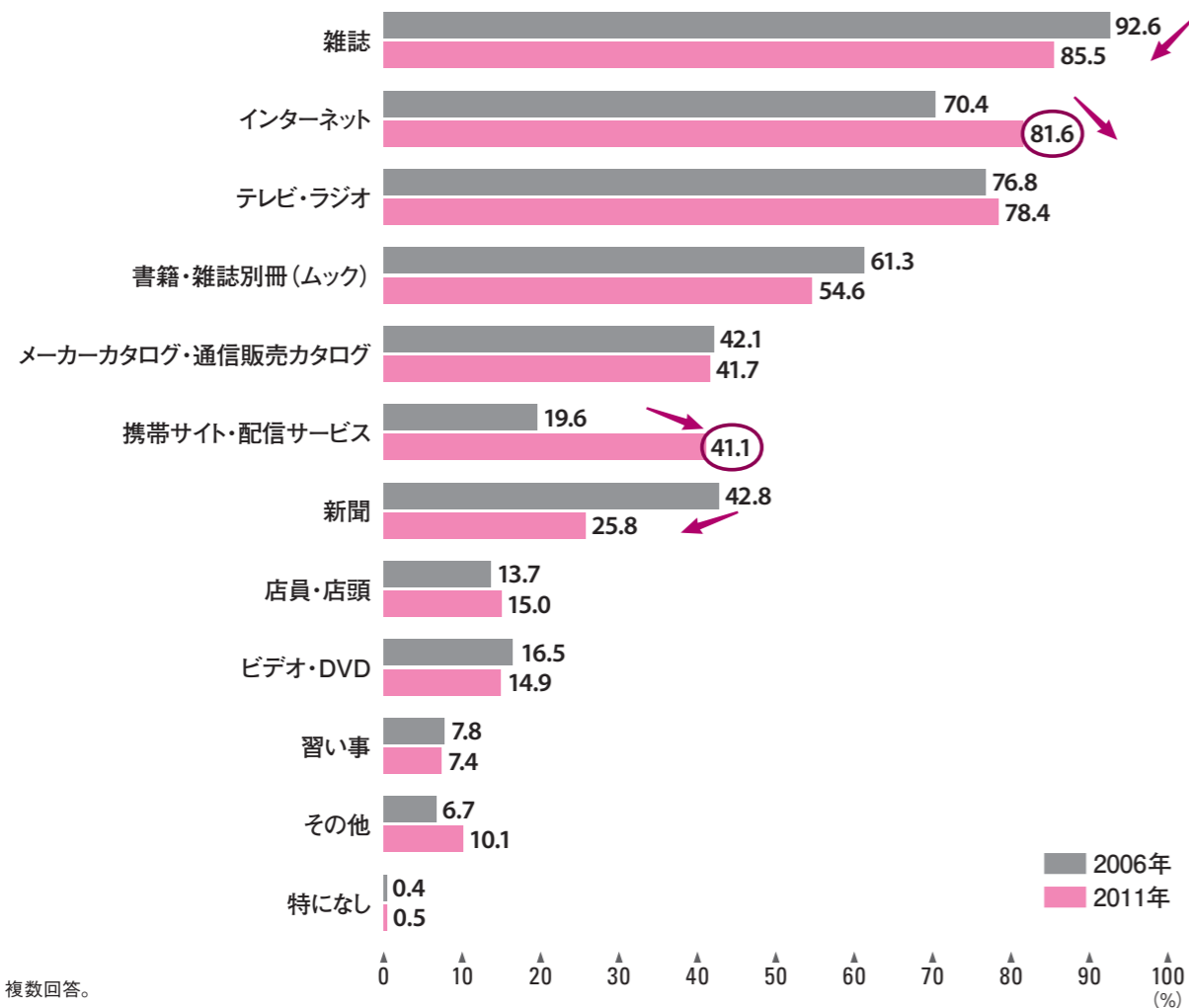
図3は、妊娠・出産・子育てについて相談したり、話し合ったりしたことがある人について聞いたものです。相談相手として多かったのは、「配偶者」「あなたの親」「あなたの友人・知人」で、いずれも9割以上を占めています。この5年間の変化を見ると、「保育士・幼稚園教諭」が32.2%から37.9%へ5.7ポイント増加したのに対し、「子育てサークルの仲間」は49.8%から43.3%と6.5ポイント減少しました。背景としては、仕事をもっている母親が増加していることが考えられます。仕事をもつ母親は、「保育士・幼稚園教諭」「産婦人科医・小児科医」

など専門家に相談する頻度が高い傾向にあります（図表略）。子どもの年齢別にみた場合、妊娠時は産婦人科の医師・看護師・助産師、0歳児期には保健師・子育てサービス窓口の人などの行政サービス、2歳児期には保育士・幼稚園教諭などへの相談が増え、子どもの年齢により相談先が変わる傾向があります。地域での自然な付き合いが減少している中で、専門家が子育て支援やつながりの役割を担うことがより重要になると考えられます。（高岡）

子育ての情報源として「インターネット」は約8割、「携帯サイト・配信サービス」は約4割の母親が利用

Q 子育てに関する情報を得るために、利用したことがあるものの番号すべてに○をつけてください。

図4 子育ての情報源(育児期母)



注) 複数回答。

研究員解説

0~2歳児の母親を対象に、子育てに関する情報源で利用したことがあるものについて聞きました。多い順に、「雑誌」、「インターネット」、「テレビ・ラジオ」、「書籍・雑誌別冊」となっています。この5年間の変化をみると、「インターネット」や「携帯サイト・配信サービス」などの電子媒体が増加し、「新聞」や「雑誌」といった紙媒体が低下しました。「携帯サイト・配信サービス」は19.6%から41.1%へ増加、新聞は42.8%から25.8%へ減少しました。

また、利用する情報源は、保護者の年齢により傾向が異なります。「携帯サイト・配信サービス」を利用している40代以上の母親は2割程度ですが、24歳以下では7割近くあり、「新聞」に関しては40代以上は3割程度ですが、24歳以下では1割程度となっています(図表略)。世代により活用する情報源が異なる様子がうかがえます。今後は、それぞれの世代のニーズに合わせた情報発信や子育て支援を提供していくことが必要になってくるでしょう。(高岡)

出典:『第2回妊娠出産子育て基本調査』(2011年)
調査対象: 妊娠期・0~2歳の第1子(ひとりっこ)をもつ妻・夫
有効回答数: 5,425名
調査時期: 2011年11月
調査地域: 全国

調査方法: 郵送法(自記式アンケートを郵送により配布・回収)
調査項目: 妻(母)の子育て意識・行動/夫(父)の子育て意識・行動/祖父母のかかわり/託児/地域での付き合い/子育て情報源/相談相手/職場環境/子育て環境・支援制度等

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。ぜひご利用ください。▶ <http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

調査データを踏まえ、園ができる支援について考える

親世代と祖父母世代の出会いの場を提供し地域のつながりをつくり出す



今回の調査では、子どもを通じた地域での付き合いが減少傾向にあることがわかりました。こうした現状で、園ができる子育て支援とはどのようなものでしょうか。恵泉女学園大学大学院教授の大日向雅美先生にうかがいました。

恵泉女学園大学 大学院教授

大日向雅美

おおひなた・まさみ

専門分野は発達心理学。主な著書に『「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない』(岩波書店)、『母性愛神話の罠』(日本評論社)など。今回ご紹介した調査の監修者でもある。

保護者と地域を園がつなげていく

今回の調査では、地域での付き合いが減少傾向にあることがわかりました。これは、今の保護者世代が育った環境を考えれば、当然でしょう。小さい頃から「知らない人には用心なさい」と言われてきた世代ですから、近所のかたに必要以上に気をつかったり、相手の領域に踏み込むことを避けたりする人も多いでしょう。

一方で、「子育て世代を支援したい」と考える祖父母世代は増えていると感じています。私は、園が両者をつなぐ橋渡し役になれると考えています。地域のかたに保育を手伝ってもらい、保護者の子育ての相談にのってもらえる機会をつくるなど、園

が仲介役になることで、保護者も地域のかたに心を開きやすくなるのではないのでしょうか。

地域の付き合いが減少した一方で、定期的な託児が増加しています(図表略)。それが背景にあるのか、「子育ての相談相手」として「保育士・幼稚園教諭」の割合が増えました(図3)。先生がたには自信もっていただきたいです。相談に対してベストな回答を出さなければと思いつぎすぎる必要はありません。保護者の悩みは、誰かにじっくり聞いてもらい、受け止めてもらうことで解決することも多いものです。この「傾聴」は、配偶者や身内ではなかなかできませんから、まさに園の出番です。

ある園では、園長先生が保護者の傾聴役になっていました。担任の先生から、「最近落ち着きがない」な

ど気になる子どもの情報を得ておき、園長先生は送り迎えの保護者の様子を観察するそうです。声をかける必要を感じたら「コーヒーでも一緒にどうですか?」などと誘います。そうして保護者とコミュニケーションを図ることで、結果的に子どもも落ち着くことが多いと聞いています。

インターネットでは得られない情報提供やサポートを園が担う

また、今回の調査では、育児の情報源をインターネットなどに頼る傾向が顕著に表れていました。園もホームページでよりわかりやすい情報を発信していく必要があるでしょう。ただし、インターネットは情報の入り口にしかすぎません。保護者をもっと実際の子育て情報やサポートが必要になったとき、人生経験の豊富な地域のかたや、専門知識をもった保育者ができることはたくさんあります。オープンマインドで地域のかたや保護者に歩み寄り、率先して地域のつながりを紡いでいってほしいですね。

ポイント

- ◎ 保護者と地域の祖父母世代をつなぐ機会を提供する
- ◎ サポートが必要な保護者の話をじっくり「傾聴」する
- ◎ インターネット上と実際の場でのサポートの両方でアプローチを行う



保育者がいきいきと働ける 「支え合い」のある園づくり

保育者の心のケアに関心を抱いている園長先生は多いようです。

今回は、心の健康を守るための職場づくりの考え方と、実際に心のケアを必要とする保育者への向き合い方を2人の専門家に聞きました。



職場づくり編

保育者の心の健康を守る 職場とは？

保育者が安心して働ける職場環境とはどのような場所なのでしょう。最近の保育者を取り巻く社会環境を踏まえ、園長先生に求められる園づくりの観点を重田博正先生にうかがいました。

Interview

はじめに ● 園長先生に知っていただきたいこと

「支え合う」園づくりが 保育者の負担を軽くする

「保育者」という仕事は ストレスを内面に抱えやすい

保育者の健康の問題と言えばかつては頸肩腕障害*が主流でしたが、最近では心のストレスの問題が中心になっています。それは、保育者を取り巻く環境が確実に変化しているからです。保育が長時間になり、保護者のニーズは多様化、さらに特別な支援を必要とする子どもが増える一方で、非正規雇用者が増加するなど、園長先生が保育者として活躍していた時代とは園の状況は大きく変わっています。そのような中で、ストレス耐性が低い人から心の健康を崩し

てしまっているのです。

このようにお話しすると「ストレスに弱いのは、本人の問題」とお考えになるかたもいらっしゃるかもしれませんが、確かに同じストレスに対して「打たれ強い人、弱い人」がいるのは事実です。しかし、個人が対応できないほどストレスレベルが高くなる状況は、やはり組織として取り組まなければならない問題です。いろいろな個性の人がいきいきと働ける職場風土は、園の強みになると認識して、リーダーシップを発揮していただきたいと思っています。

保育者は、子どもが好きで日々働



重田博正先生

しげた・ひろまさ

◎大阪社会医学研究所 主任研究員
専門は労働科学。さまざまな労働現場の健康管理について調査・研究を行う。著書に「保育士のメンタルヘルス」(かもがわ出版)など。

が進んでも労働意欲が低下しにくく、疲れても無理がきく傾向にあります。それだけに、「労働意欲の低

下」が起きたときには心の健康を大きく崩していることもあります。園長先生には「子どもが好きな保育者であるからこそ、心の健康を損なう恐れは誰にもある」という視点をもっていただければと思います。

保育観の共有が 「支え合い力」を強くする

では、保育者の心の負担を少しでも軽減するために、園長先生にはどのようなことができるのでしょうか。

実は、園の運営のあり方、職場集団の雰囲気はストレスの度合いと密接に関係していることがわかっています(右図参照)。

特に重要なことは保育観の共有です。保育を通して目指すものを共有できていれば、日々の仕事の中で自分が喜びと感じたことを仲間にも一緒に喜んでもらえ、自分を含めた保育者が園の中で支え合っていることを実感できるからです。

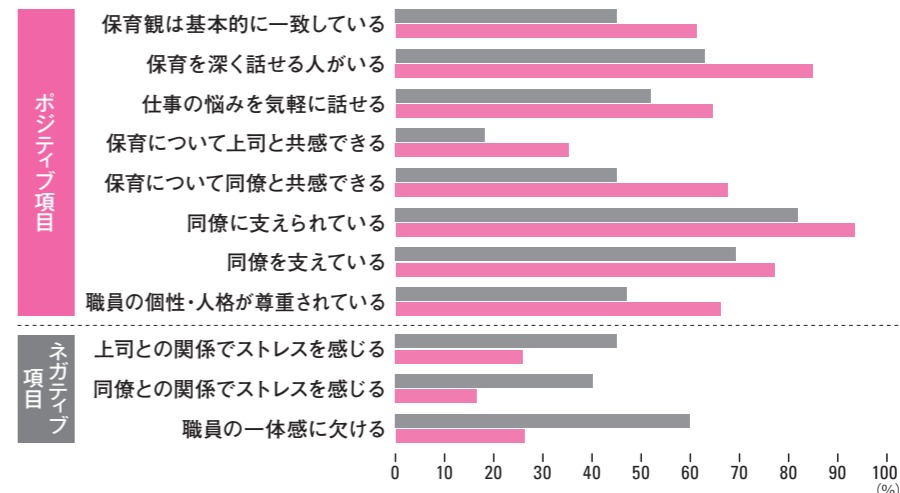
心の負担が大きくなっているときは、保育観の相違が原因になっていることが多く見られます。保育観の共有は保育者の人間関係の質を決める重要な要素になっていると言えるのです。

そこで園長先生に心がけていただきたいことは、園内で保育について語り合い、保育観を確かめ合う機会をつくることです。会議では保育内容についての議論にできるだけ時間をあて、さらに行事の後や年度末の「まとめ」を重視するといった過程で、保育観の共有が徐々に進みます。子どもの行動をどう見るか、

心の健康度が高い保育集団は、保育を通じて共感し、支え合っている

職場のストレス度別職場集団

■メンタル症状の得点が高い職場(心の健康度が低い) ■メンタル症状の得点が高い職場(心の健康度が高い)



※A市職員労働組合保育所支部健康プロジェクト「保育所職員のストレスアンケート」(2007)。A市15園のうち、メンタル症状に関する質問の平均得点が「高い」5カ所と「低い」5カ所を比較。

保育者の経験などによって判断が分かれるときも、違いを認めながら話し合うことで園全体の経験がさらに豊かになります。

「支え合う」園の土壌として 労働負担の軽減が大切

園長先生に知っておいていただきたいのは、ストレス対策としてはまず労働負担の軽減が非常に有効であるということです。ストレス要因の中心は労働負担の大きさであり、心理的・時間的ゆとりがないと、「支え合い」の基盤となる共感的人間関係が難しいからです。

これはある特別支援学校の事例ですが、行事の内容や回数などを削り、それまで教員が取れなかった休憩を毎日30分必ず確保するなど、教育内容や時間割を見直したことで、1カ月以上の休業者がゼロになったばかりか、パニックを起こす子どもが減り、校内での子どものケ

ガが激減しました。先生の労働負担が軽減され、心に余裕をもつことが、結果的に子どもにより影響を与えるという例だと思います。

私は、子どもを見る目、保護者を見る目、そして同僚を見る目はひとつであってほしいと思います。もしもストレスを抱えた同僚を見る目が厳しくなっているとしたら、それは忙しさが仲間を見る目をゆがめたのであり、そのままではいつしか子どもや保護者を見る目も厳しくなってしまうかもしれません。保育者の心の健康は何より子どもたちのため、保育の質向上のためという、言わば園全体を見渡した園長先生のリーダーシップが大切だと考えます。



次ページにチェックシートを掲載しています。ぜひ活用ください。

*頸肩腕障害とは、首(頸部)から肩・腕・背部などにかけての痛み・異常感覚(しびれ感など)などの症状を指します。

「支え合い」のある園をつくるための「チェックシート」

◎深く悩まずに直感でお答えください。
◎コピーして指導的な立場にある先生がたと一緒に活用していただくことをおすすめします。
◎リーダー研修などにもぜひご活用ください。

カテゴリー	チェック内容	自己評価	
労働負担の軽減	① 労働負担を軽減するために仕事のプロセスなどを見直しているか	<input type="checkbox"/> よくする <input type="checkbox"/> たまにする	<input type="checkbox"/> あまりしない <input type="checkbox"/> まったくしない
保育観の共有	② 園長と保育者、保育者同士が子どもの育ちについて話し合う場面や環境があるか	<input type="checkbox"/> よくある <input type="checkbox"/> たまにある	<input type="checkbox"/> あまりない <input type="checkbox"/> まったくない
	③ 「こんな子どもに育てたい」という保育で目指すものを和やかな雰囲気の中や雑談の中で共有しているか	<input type="checkbox"/> よくする <input type="checkbox"/> たまにする	<input type="checkbox"/> あまりしない <input type="checkbox"/> まったくしない
	④ 保育者それぞれの個性や多様性を認めながら話し合っているか	<input type="checkbox"/> よくする <input type="checkbox"/> たまにする	<input type="checkbox"/> あまりしない <input type="checkbox"/> まったくしない
信頼関係の構築	⑤ 保育者に笑顔が見られるか	<input type="checkbox"/> よくある <input type="checkbox"/> たまにある	<input type="checkbox"/> あまりない <input type="checkbox"/> まったくない
	⑥ 保育者の家庭の事情や体調など、個人的な配慮をしているか	<input type="checkbox"/> よくする <input type="checkbox"/> たまにする	<input type="checkbox"/> あまりしない <input type="checkbox"/> まったくしない
	⑦ 保育者がうれしいことを報告してくれるか	<input type="checkbox"/> よくある <input type="checkbox"/> たまにある	<input type="checkbox"/> あまりない <input type="checkbox"/> まったくない

●上記のチェック結果を踏まえ、自園のよい点(強み)と改善したいこと(弱み)の傾向をご記入ください

●今後、「支え合い」のある園づくりをするために取り組みたい具体的な行動をご記入ください

※このチェックシートは、本誌18ページにご登場いただいた重田先生のお話をもとに編集部が整理したものです。

個別サポート編

心のケアを必要とする保育者を園全体で支えるには？

実際にストレスなどで心の健康を崩し、ケアを必要とする保育者にどのように向き合っていけばよいのでしょうか。特に若い保育者を想定して、園長先生の心構えを臨床心理士の永田陽子先生にうかがいます。

Interview

はじめに ● 園長先生に知っていただきたいこと

園長先生のやさしいまなざしがストレスに向き合う力を育む

他者との関係が希薄な社会で若い保育者は育ってきた

園長先生の中には、「自分たちは同じ仕事を元気にやってきたのに、最近の若い保育者は、なぜ心の健康を損ねてしまうのだろう？」と不思議に思っているかたもいらっしゃると思います。

まずご理解いただきたいことは、園長先生ご自身が若手だった頃と若い保育者を取り巻く今の社会状況が、さまざまな面で異なっているということです。保育者に限らず、最近の若い世代の人たちは、ゲームやインターネットが普及した中、自然の中で異年齢の友だちと遊び込んだり、自分の内面に向き合ったりする時間が少なくなっています。そのため人との関係づくりに苦労することもあり、ストレス耐性も低下していることが指摘されています。

まして、最近は子育てに悩む保護者のさまざまな不安や悩みへの対応

も必要なことから、保育者は家庭との関係づくりにも苦労しています。そうした中で、保育者が心の健康を崩してしまうのは、決して個人の問題ではなく、今の若い人たちに共通する、いわば社会全体の問題だと言えます。

できることを認めて仕事を通した成長を待つ

保育者がストレスに向き合う力を身につけていくために、園長先生にできることは何でしょうか。私はまず、「この世に完璧な人などはいない」ということを念頭に、保育者を見守っていくことが大切だと考えています。

「資格を必要とする専門職に就いたのだから、仕事はできて当然」という視点で保育者の行動を見ると、出来ないところ、不足しているところばかりが目についてしまいがちです。しかし、保育の仕事は、仕事の



永田陽子先生

ながた・ようこ

◎臨床心理士。東京都北区育ち愛ほっと館(子ども家庭支援センター)専門相談員。NPO法人子ども家庭リソースセンター理事。著書に「人育ち唄 らくらく子育て・子育て支援」(エイデル研究所)、「人とかかわりで「気になる」子」(ひとなる書房/共著)など。保育所への巡回相談による支援も行っている。

中でさまざまな失敗を重ねて学ぶものだと、園長先生もご存じだと思います。経験の少ない若手保育者が悩んだり、迷ったりすることは実は当たり前前のことで、そういう視点に立てば、「失敗もあるけれど、ここはちゃんとできている」と認められる

ようになるのではないのでしょうか。
「がんばろう」「成長しよう」と思えると、人は十分に力を発揮できますし、いつか必ず成長するものです。園長先生はじめベテランの先生

がたには「がんばろう」と思っている若手に不足している点を指摘すること以上に、「ここがしっかりできているね」と成長を認めていただければと思います。そうして、自己肯

定感を大切にしながら、子どもと接するのと同じように、保育者の育ちをじっくりと信じて待つ、そんな環境をつくっていただきたいと思



Q & A

保育者の心のケアに関する疑問に、永田先生がお答えします。

Q 保育者の心の問題に予兆やサインはあるの？

A 元気がなく、遅刻するなど行動面の変化に注意

異動や新規採用で新しい園に入ったとき、多くの人は慣れるまで数カ月はかかります。その間に、園に慣れて、発言が増え、表情がやわらいできているなら安心ですが、元気がなくなったり、遅刻したり、また言葉数が少なくなったり、身づくろいに気を配らなくなったりと、行動面で変化が出たら注意が必要です。また、子どもへの接し方が不必要に厳しくなることもあるので、そうした変化にも注目するとよいでしょう。

Q 予兆やサインを見つけた後はどうすればいいの？

A 本音を語りやすい間口の広い問いかけを

「なんだか元気がないな」と思っても、「大丈夫？」「悩みはあるの？」などイエス・ノーで答えられるような聞き方だと、なかなか本音は聞けません。むしろ「最近どう？」など間口が広い質問のほうが「なかなかお話ができない保護者のかたがいて…」などと本音を語りやすいものです。もちろん、答えたくないときは「特に何も」と、話が終わってしまうでしょう。でもそれは「今は話たくない」というその人の本音です。焦って聞き出そうとせず、その場は「そう」と受け止めて、また見守りながら別の機会に聞いてみましょう。

Q 仕事がうまくいかずに悩んでいる若手に声をかける際のポイントは？

A 「話したいときに聴く」という姿勢を見せる

状況も聞かぬうちに「仕事だから悩むのは当たり前」と言いたくなることはありませんか？ 自分としては「失敗してもいい」と言っただけなのに、相手にとっては「仕事の悩みは、自分ひとりで解決しなさい」と突き放されたように聞こえることがあります。「私であれば一緒に考えるから、話したくなったら声をかけて」と言えば、ひとりで抱え込まなくて済むことがわかり、話したくなってきたときに自分の意思で相談することができるでしょう。時には、園長先生が若い頃に悩んだ経験などを話せば気が楽になることもあります。

Q 明らかに元気がなくなってきた保育者への対応は？

A アドバイスよりもまずは話をよく聴くこと

人は話をして、心を軽くしてからでないと、アドバイスを受け入れにくいときがあります。相手の状況を知るためにも、まず話を聴き、批判せずに受け止めましょう。そのうえで、どうすれば本人が楽になるかを考え、「こんな方法もある」と例示し、判断は本人に任せます。医療機関の受診は本人に任せるのが基本ですが、睡眠など当たり前でできていたことができなくなることが多いので、「眠れないままだとつらいから、眠れるようにかかりつけの病院でもいいから、相談してみたら」と勧めるなどすると足を運びやすくなるようです。

保育者の心のケアのポイント

- 1 心の健康を崩してしまうのは、若い人共通の社会全体の問題。成長を認めるまなざしで見守る。
- 2 悩みを抱えている若手には、「あなたが話したいときにはいつでも聴く」という姿勢を示す。
- 3 心の問題の克服には年単位の時間が必要。わずかな改善であっても喜び、自己肯定感をじっくりと高める。



2012年にベネッセ次世代育成研究所が実施した「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」(*)では、人の話を最後まで聞く、相手の意見を聞く、物事に挑戦する、自分の気持ちを調整するなどの力がその後の「学びに向かう力」の土台になることが明らかになりました。「学びに向かう力」を、幼児期にどう育むかを考えます。*詳しくは2013年春号をご覧ください。

第1回 「人の話を最後まで聞く力」を育む

イラストで見る! 「人の話を最後まで聞く力」が育まれた状態とは?

Aちゃん
5歳・冬〜春

12月に行われた餅つきでのことです。前日の帰りの会で、Aちゃんのクラスの担任は「明日の餅つきのごとで、先生から大切なお願いがあります。明日は、お箸を家から持ってきてください」と言いました。ところが、帰りたくて夢中になっていたAちゃんは、すっかり先生の話聞き

らしてしまつたのです。餅つき当日、うれしそうに自分の箸を見せ合う友だちを見て、自分の箸を持ってくるのを忘れたことに気がついたAちゃんは、担任に話し、園の箸を借りることに。自分の箸を持ってこられず、少し寂しい気持ちになったのです。

そして3月。お別れ遠足の前日のことです。帰りの会で先生がこう切り出しました。「今から明日の遠足のごとで、大切なお話をします」。

楽しみにしている遠足のごとであれば聞き逃すわけにはいかないと、Aちゃんは先生に注目。先生は「おたよりに、おしぼりを持ってきてほしいと書くのを忘れたので、おうちの人に伝えてほしい」と言いました。



Aちゃんは、今度は忘れないようにしようと思いました。そして家に帰るとすぐに、お母さんに「明日、おしぼりを持って行かなくちゃいけないんだよ!」と伝えました。

先生のお話をしっかり聞いたので、クラス全員がおしぼりを持ってきました。公園でお弁当を食べながら先生は「今日はみんなおしぼりを持ってきたんだね。先生のお話をちゃんと聞けるなんて、さすが年長さんだね」とクラスのみんなをほめました。



お箸を忘れたときはとても寂しかったの。だから今度は、ちゃんと先生のお話を聞かなくちゃ! って思ったんだよ



聞いた内容を理解し、行動に結びつける力

「人の話を最後まで聞く力」というと、行儀良く静かに聞く様子をイメージするかもしれませんが、必ずしもそうではありません。「人の話を最後まで聞く力」は、①最後まで聞く、②話の内容や相手の気持ちを理解する、③そのうえで自分がどう行動したらよいかわかる という3つの要素で成立するものです。静かに聞いているだけでは理解しているとは言えず、行動(事例で言えば、おしぼりを忘れずに持ってくること)まで結びついて、初めて「人の話を最後まで聞いた」と言えるのではないのでしょうか。

子ども自身が「人の話を最後まで聞く力」の重要性に気づくのは5歳頃からです。なぜなら、聞かずに困った事態が起きたときに「これからはちゃんと話を聞こう」と意識できるようになるからです。4歳頃までは、たとえ話を聞かなくて困った状況に陥っても「自分が聞かなかったから失敗した」という意識はまだもてないことがあります。

●「人の話を最後まで聞く力」が育つのに必要な経験

- 0~2歳: 周囲との信頼関係の基盤づくりの時期。自分の発する言葉を大人が繰り返し言うことで、気持ちをくみ取ってもらったうれしさを知る。
- 3歳: 人と言葉を交わす心地よい経験を積む時期。自分が言ったことや気持ちを受け止めてもらえたうれしさ、自分に語りかけてもらえる安心感を体験する。
- 4歳: 集団の中の一員として、全体に向けた話が聞けるようになる時期。担任がクラス全員に語りか

けているときも、「自分も聞かなければ」ということが少しずつわかり始める。また、数人の遊び仲間言葉が伝わったうれしさも感じるようになる。
5歳: 静かにしゃべらずに聞くことが大事だとわかってくる時期。担任の話聞きも失敗を経験して、「先生の話は自分にとって大事だから聞こう」と自覚が芽生えてくる。仲間どうしで考えや思いが伝わったうれしさを体験する。



聞いてよかった、聞けばよかった場面をつくる

5歳頃からは、保育者は子どもが話をしっかり聞いて理解し、行動できたことをほめ、確認することが大切になります。また、聞かなかったから困ったという状況を意図的につくることも大切です。前ページのように子どもが話を聞かないことであとで困ってしまう状況をつくることも一案です。もちろん、聞きもらしてしまう子どもはいますから、失敗しても園でフォローできるもの(お箸やおしぼりのように忘れても差し障りのないもの)で試みます。また、あらかじめ保護者に「子どもの成長のためにわざと失敗する場面をつくる」と伝えておけば、子どもの育ちに対する保護者の理解も深まります。

遠足の話をするよ」と言えば、子どもは大事な話だと判断し、耳を傾けます。「大切な話だけど聞けるかな?」と語りかけて、子どもの気持ちがこちらに向かったことを確認してから話し始める配慮も必要です。また、長々と話すのではなく、要点を的確に伝えることも重要です。

伝えたいことをどのように話せば、子どもに伝わるのか、子どもの気持ちになって自身の語りかけを振り返ってみるとよいでしょう。



「人の話を最後まで聞く力」が育つためには、話す側の力量も問われます。例えば、冒頭に「明日の